

別紙 1－1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 佐渡 忠洋

論 文 題 目

バウムテストの「ゆらぎ」の構造

論文審査担当者

主 査 名古屋大学 大学院 教育発達科学研究科・教授 森田 美弥子
名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・教授 松本 真理子
名古屋大学大学院 教育発達科学研究科・准教授 清河 幸子

別紙 1-2

論文審査の結果の要旨

バウムテストは、Koch, C. が考案し、1949 年に発表して以来、「(一本の) 実のなる木」を描くという心理検査として臨床場面ではよく使われている。先行研究も多く、日本ではこれまで 800 編を超える論文が発表されている。しかし、バウムテストそれ自体がどのような特徴をもった技法であるのかについて十分に論じられてはいない、という問題意識のもと、本論文では、バウムテストという主題に迫ることが意図された。

臨床実践のなかでクライアントによって描かれたバウムは個人によって異なり、また同じ人であっても面接経過において異なるバウムを描く場合もあれば、期間においてもほぼ同じバウムを描く人もいる。そうした現象は、これまで個人の属性や病理などにより比較検討されたり、心理療法その他の体験の影響として解釈されてきたりした。そこには、バウムそのものがもつ「変化すること／しないことの両面を含む、一方向的ではない表現の可能性としての幅」が存在しているのではないかと考え、これを「ゆらぎ」と定義し、バウムが如何なるゆらぎの構造を備えているのかを、心理臨床に益する形で明らかにすることを目的として、研究が行われた。

論文全体の構成と各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、日本で報告された約 700 編のバウムテストに関する先行研究が概観されている。研究内容としては基礎研究や追試やレビューの不足などの問題があること、方法論では、数量化研究が主流であったが、指標の定義、数量化の信頼性、統計学的分析の誤用などの問題も含まれていることが示唆された。それらをふまえ、今後の研究では、Koch, C. の基本姿勢を導入しつつ、基礎研究と臨床研究を充実させることの意義を論じた。

第 2 章では、バウムテストそのものがもつ特徴を理解するために、「ゆらぎ」すなわち「一方向的ではない表現可能性としての幅」に着目し、バウム表現においてどこが変化しやすい／しにくいのかという観点から、ゆらぎの構造を明らかにすることを本研究の目的とした。具体的には、歴史的・理論的検討を行い、調査からゆらぎの現象を記述した上で（第 1～3 章）、異なる条件のもとで同一対象者にバウムテストを実施した研究成果を提示し（第 4～7 章）、以上を総合し、バウム表現のゆらぎの特徴を明らかにし（第 8 章）、総合考察を行う（第 9 章）。方法論として、多数の指標を用いて網羅的に検討するスクリーニング法を併用しつつ、得られたデータから検討対象とする指標を絞るスポットライト分析を主に用いていくことについて述べた。

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

第3章では、ゆらぎという現象を確認することを目的として、異なる実施間隔で大学生を対象にバウムテストを二度実施する調査を行った。同日に連続で実施（69名）、同日実施の間に質問紙法を挿入（68名）、1週間の間をおいて実施（42名）、3ヶ月の間をおいて実施（22名）の4群の結果から、変化が見られた指標は27のうち7つのみで、4群間で一致したものはなかった。しかし、約7割の対象者は描画が変化したと感じていた。ここから、バウム表現の変化とは何かという問題提起がなされた。

第4章では、実施法（個別法と集団法）がバウム表現に与える影響を検討した。大学生48名を対象に、それぞれの条件で計2回実施した。幹表面の表現に焦点づけて分析した結果、個別法に比べ集団法で幹の表面に描写が多く、他者や環境から何らかの影響を受けていることが考えられた。

第5章では、用紙の特徴がバウム表現に与える影響を検討した。縦長と横長の用紙で実施（32名）、用紙の大小を変えた実施（33名）の結果、はみ出し表現に焦点づけられたが、上方へのはみだし表現は用紙の影響を受けにくく、バウムが縦に長い特性を本質的に有することが示唆された。

第6章は、教示がバウム表現に与える影響を検討した。通常の方法で実施した後、「今のと違う木を」と教示して二度目を実施した群（48名）、通常の実施後に樹種を尋ね、「〇〇の木を描きましたが、今度は違う形の〇〇の木を」と教示して二度目を実施した群（54名）の結果から、二度目の表現では枝の増加と包冠線の減少が認められたことから、樹幹部は描き手の能動的態度によって変化する部分であることが示唆された。

第7章は、描画プロセスからの検討を行い、大学生158名の個別法実施結果について、バウムをどこからどのように描き始めるかを検討した。その結果、約8割の人が幹から描き、さらに約6割が八の字で幹を形成した。幹は表現の抛り所・基点となる部分でと考えられた。

第8章では、3～6章で用いた全10群のデータ（計475名）を用いて、バウムのどこが変化しやすいか／しにくいのかという「ゆらぎ」の構造を検討した。それぞれ異なった条件で同一対象者に実施した2枚のバウムテストの比較結果を総合したところ、群によってゆらぎの幅は異なるものの、共通して樹冠部と枝はゆらぎの程度が大きく、幹や根についてはゆらぎが少ないということが共通していた。

終章において総合考察として、バウムテストにおける「ゆらぎ」と関連する心性についてまとめ、変化しやすい部分についての解釈は慎重であるべき等の示唆等の提言、及び今後具体例を通した研究を蓄積することの必要性等の課題について論じた。

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

以上の論文内容について審査委員会は慎重に審議を行い、次のような問題点の指摘や助言がなされた。①テーマとなっている「ゆらぎ」概念について、類似概念との異同等を十分に行って明確な説明がなされるとよい、②本論文で示された研究は量的分析に基づいた基礎研究のためかバウムの全体像よりは各部分の特徴をとらえることに留まっている印象がある、③それらの問題を乗り越えていくために事例研究や臨床実践からの検討が期待される。

これらは申請者においても十分認識されており、今後研究を継続する中で、さらに深めていく予定である旨の説明がなされた。以上の点を含め本論文は、バウムテストという描画法それ自体の特徴に迫ろうとする意欲的な研究であり、膨大な先行研究の分析を踏まえた労作であることは高く評価された。今後さらに質的研究も加えていくことにより、臨床心理アセスメント研究全体の発展にも寄与し得る学術的意義があると判断された。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。